

「一年目の香り」

鹿児島県薩摩川内市 小田原 正子

審査員特別賞

スーパーの食品売り場に、背を丸めた老女がメモを片手にカートを押して物色している。その傍らに、寄り添うように背筋をしゃきつと伸ばした、白髪の夫らしい老人がいた。

コーヒーコーナーの前で「おいコーヒーがもうなかったよ」と、コーヒーの瓶と角砂糖を籠の中に入れた。

平成二十二年三月二十六日の昼下がりに、私達のいつもの至福のひとつときだった。

その夜、夫に異変が起きた。脳梗塞というアクシデントに見舞われる。

日々に、回復の兆しを見せるある日、病院の面会室で見舞客と夫は話していた。すると、「コーヒーでも注文しなさい」と、いきなり傍らの私に言う。一瞬、戸惑った。夫は面会室を喫茶店とと思っている。脳障害からくる錯覚に憐れとも思っていた。が、客をもてなす真心だけは失っていなかった。

やがて紅葉の季節に入り、退院の日も決まった。カレンダーを眺め「故郷の山や川を早く見たいね。二人の時間を大切に

に過ぎそう」と言った。それから数日後、夫の願いは無情に終わってしまった。

夫と植えた二本の桜が、今年は見事な桜色に輝いた。そこで、夫婦桜と名付ける。

この季節になると、竹林を散策して笛探しが夫の楽しみだった。その後のコーヒータム。あの日のコーヒーも開封されないままに。愛用の藍色のカップもちよこんとその横に。

夫がやっていたように、一匙のコーヒーと角砂糖を一コ入れ、電気ポットのお湯を、トトトツと注いだ。一年ぶりの香りである。

「おはよう!!お父さん。朝一番のコーヒータムですよ」。遺影の前に供える。

(正子!!お前も飲めよ)……確かに夫の声。

……「ではひと口ね」。そつと口に含んだ。ほんのりとした香りが私を包みこんでくれた。

夫は、私の心の中に今も生きている。

